

ベンガルのバウルの文化人類学的研究(2)

村 瀬 智

要 旨

本研究は、インド・ベンガル地方の「バウル」とよばれる宗教的芸能集団の民族誌である。

詩人タゴール (Rabindranath Tagore 1861-1941) が、20世紀初頭にバウルの歌の豊潤さを紹介して以来、それまで「奇妙な集団の風がわりな歌」とみなされていたバウルの歌が再評価されるようになった。タゴールの影響により、その後ベンガル人学者によって膨大な数のバウルの歌が採集され、なかには注釈つきの歌集として出版された。また、バウルの歌を分析し、バウルの宗教を考察した専門書もいくつか出版された。もちろんこれらの研究は、バウルについてのわれわれの理解におおいに貢献したのであるが、そこには「人間としてのバウル」を専門的に紹介しようとした民族誌的文献は、事実上、皆無である。本研究は、バウルの民族誌的記述と分析を通じて、カースト制度と表裏の関係にある世捨ての制度を考察し、インド文明の構造的理解を試みようとするものである。

キーワード：カースト、カースト制度、世捨て、マドゥコリ、ベンガル、バウル

本稿の前書き

本稿は、『大手前大学社会文化学部論集』第6号に掲載された拙稿〔村瀬 2006：331-349〕のつづきである。本研究「ベンガルのバウルの文化人類学的研究」は、一連の研究であるので、前稿もあわせて読んでいただきたい。

注および参考文献は、本稿に該当する分のみを提示する。

読者の便宜のために、地図は本稿にも提示する。

Ⅱ. ベンガルのバウル：民族誌的記述

1. バウルの道

世捨て人のもっとも基本的な特徴は、火を放棄することであった。そのことは、世捨ての儀式を規定したダルマシャーストラ文献のなかに象徴的に描かれている [Kane 1941: 954-955]。世捨て人は、しばしば「火のない男」(アナグニ) とよばれてきた。火なくして祭祀をすることができない。だから彼は家庭をもつことができない。だから彼はさまよい歩く。火なくして料理はできない。だから彼は食べ物を乞いもとめる。死に臨んでさえ、彼は「火のない男」だ。彼の死体は、俗人の遺体のように火葬されない。「火のない男」にふさわしく、彼は「土葬」されるのである。しかし、火の放棄から導きだされそうな世捨て人の特徴は今でも残っているが、火の放棄そのものの宗教的意味は失われてしまったようである。

わたしのフィールドワーク中に、火の放棄について述べたバウルはひとりもいなかった。しかし、彼らは確かにマドゥコリ¹⁾によって食べ物を得ているし、火葬ではなくて土葬される。そして、特定の住居をもたず、村から村へと放浪しているバウルが、バンクーラ県やメディニプール県にはまだ少しいるようだ。しかし、ほとんどのバウルは今日ではもはや放浪の生活をしていないが、バウルが定住生活を始めたのは、それほど昔のことではなさそうである。たとえば、現在もっとも有名なバウルであるプルノ・チャンドロ・ダシュ²⁾は、少年時代ずっと放浪の生活だった。プルノの母は、「あの村のアクラ³⁾で1ヵ月、この村のアクラで3週間というような生活だった。そのためわたしは、四人の子をすべて違うところで産まねばならなかった」と証言した。彼女はさらに、「プルノはまだ小さなこどもだった。そのプルノが、どこでもいい、ビルブム県のどこかへ住もうと、わたしに提案しました」と語ったのである。プルノの家族は、村から村へと放浪し、一軒一軒マドゥコリをして生活していたのである。

マドゥコリの生活は、ひとりの人間が「バウルになる」ためにも、また「バウルである」ためにも不可欠の要件である。これは彼らを選んだライフスタイルである。そしてこのライフスタイルそのものが、彼らが主張する「バウルの道」(バウル・ポト)の基

1) ベンガル語の辞書 (*Samsad Bengali-English Dictionary*, Second Edition, 1987.) は、「マドゥコリ」という語を、「蜂が花から花へと蜜を集めるように、一軒一軒物乞いをして歩くこと」と説明している。

2) Purno Chandra Das (1935-)。プルノは、プロの音楽家として成功した最初のバウルである。1954年、彼は「アカシバニ」(インド国营放送のベンガル語名)に出演し、その傑出した歌唱力で一躍有名になった。彼はその後、インド国内だけでなく海外にも活動の場を広げ、ソ連(当時)、アメリカ、ヨーロッパ、日本など世界各地で公演を行なっている。彼は、「バウルはマドゥコリの生活をやめ、プロの音楽家としての道を歩むべきだ」と主張している。

3) アクラとは、ベンガルのビシュヌ派(チョイトンノ派)の僧院をさすが、ベンガルのあちこちの村には出家者が自由に寝泊まりできる小屋があり、それらもアクラとよばれる。

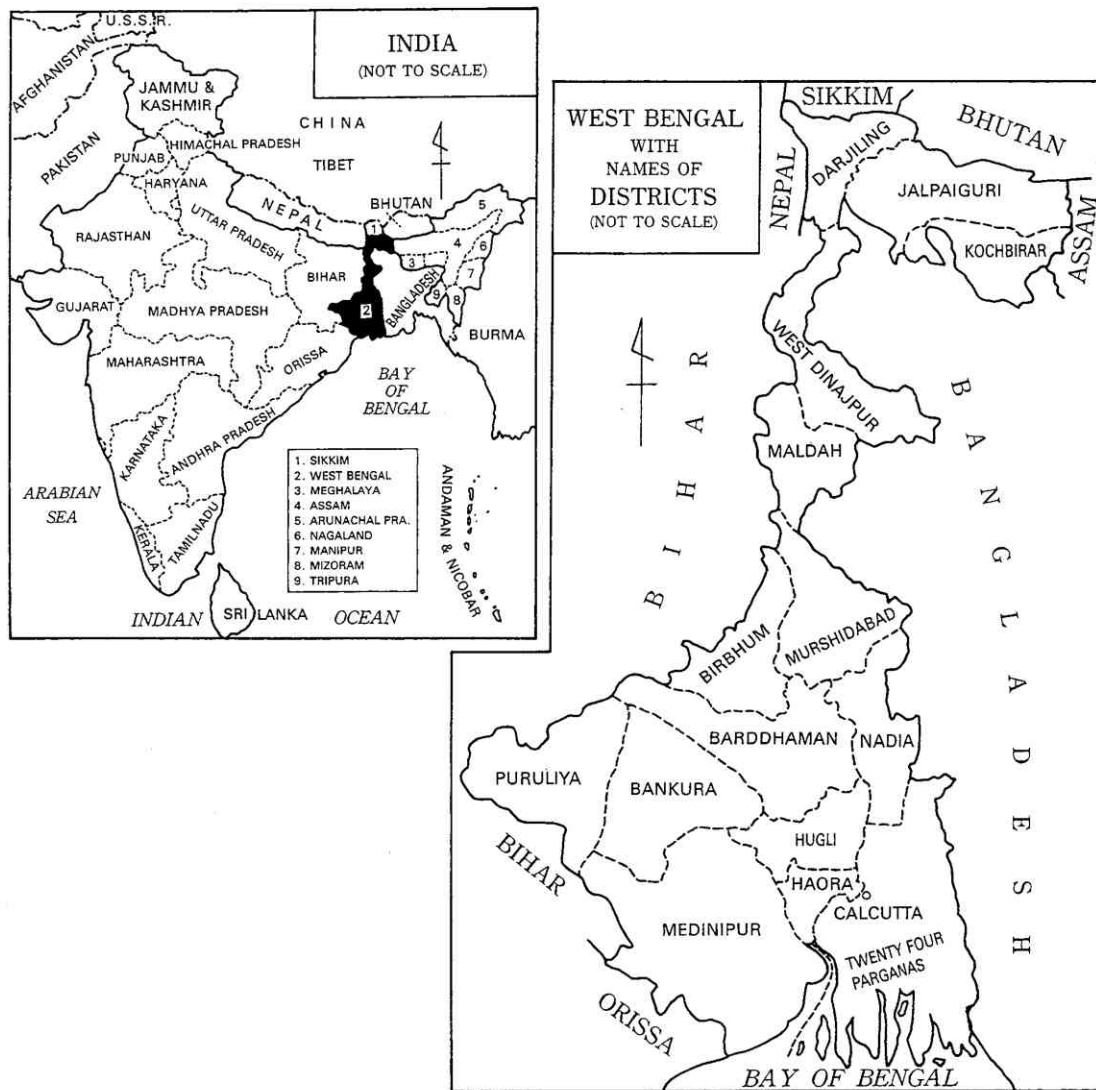


図1：インドおよび西ベンガル州

(出展 Tourist Map of West Bengal)

本なのである。バウルの道とは、「マドゥコリの生活にはじまり、神との合一という究極の目標にいたる道」である。それは「人間の肉体は、真理の容器」という彼らの信仰に基づいている。バウルの説明は実に明快である。「わたしたちは、富をもたない乞食です。わたしたちの唯一の財産は、この肉体です。しかし、この肉体には神が住んでおられる。それ以上に何が必要ですか」と語るのである。

バウル研究者のあいだでは、「バウル」という語は、「ベンガルのひとつの宗派とその構成員をさす」という見解が、ほぼ承認されているようである。しかしこの見解は、は

4) たとえば、ディモック [Dimock 1966 : 251-255]、ダスグープタ [Dasgupta 1969 : 160]、キャプウェル [Capwell 1986 : 10] を参照。

たして正確なのだろうか。

フィールドワークの期間中、わたしはしばしば、バウルが自分自身のことをどのように認識しているかについて質問をした。わたしがもっとも頻繁にきいた答は、つぎのふたつである。(1)「わたしはバウルです」。(2)「わたしはバウルの道をあゆんでいます」。しかし、だれひとりとして「わたしはバウル派の構成員です」とはこたえなかった。バウルにとって、彼らが宗派の構成員であるかどうかは、それほど重要なことではなさそうである。

フランスのインド学者ルヌーは、「インドの宗派の基準」について論じている。彼によると、インドの宗派は、つぎの3つの基準をそなえているとされる。第1に、特有の神格や聖典を堅持していること。第2に、独自の哲学的視点を採用していること。そして第3に、だれかによって創設されたこと [Renou 1968: 91-95] である。

これらの基準をそなえたインドの宗派を検討してみると、そのほとんどの場合、構造的にふたつの部分からなりたっていることに気づく。第1に、行者、苦行者、隠とん者、出家者などの宗派の中心的部分、つまり世俗の世界を放棄した「世捨て人」である。そして第2に、数量的にははるかにおおきい、家庭をもった一般の信者グループ、つまり「在家の人びと」である。

インドの宗派の基準をかんがえると、たいへんあやふやで漠然としたものではあるが、ベンガルには「バウル派」(バウル・シヨンプロダエ) と呼ぶことができそうな組織が存在する。そしてベンガルのバウル派が、インドの宗派としての構造をそなえているかのように、そこにはふたつの基本的な通過儀礼がみとめられる。

まず第1は、「ディッカ」とよばれる「バウル派への入門式」、あるいは「バウル派の特定のグルへの入門式」である。この入門式のグルは「ディッカ・グル」とよばれ、入門者の耳に「ディッカ・マントラ」をふきこむ。ディッカのあと、「シッカ」とよばれる一連の「宗教的トレーニング」が開始されることがあり、そのグルは「シッカ・グル」とよばれる。シッカ・グルは、ディッカ・グルと同一人物であってもよいし、別人であってもよい。また、複数のシッカ・グルをもってもよい。

そして第2は、「ベック」とよばれる「世捨て人の身分への通過儀礼」である。この通過儀礼のグルは「ベック・グル」とよばれ、弟子に新しい「こつじきの鉢」(ピッカパトラ) をあたえる。男性の弟子は、こつじきの鉢にくわえて、新しい「ふんどし」(ドリ・コウピン) もうけとる。

それでは、いったいだれがバウル派を構成しているのでしょうか。わたしの観察によると、バウル派の構成員には、マドゥコリで生活するバウルだけでなく、かなりの数の在家の信者も存在する。それらの在家の信者は、ベンガルの田舎の町や村に住む、ごくふつうのヒンドゥー教徒やイスラム教徒である。しかしそれらの在家の信者は、彼らの

グルに入門し、一連の宗教的トレーニングを受け、バウルの「サドナ（成就法）」を実践しようと努力しているのである。たとえば、ビルブム県のラムプールハートから東に約8キロのT村に、SGBというバウルのグルが住みついており、その村で重要な役割をはたしている。ほとんどすべての村びとは彼の信奉者だったし、実際、そのおおくは彼の弟子だった。しかし弟子である村びとは、自分たちのことをバウルと名のらなかったし、他者からもバウルとみなされていなかった。つまり、たとえバウル派の構成員であっても、その人がマドゥコリの生活をしないかぎり、バウルとはみなされないのである。

論理的に、ディッカの通過儀礼をうけた人は、すべてバウル派の構成員である。バウル派の在家の弟子は、ディッカの通過儀礼はうけているが、ベックの通過儀礼をうけていない。ディッカは、弟子にマドゥコリの生活を強制しない。もし在家の弟子がベックをうけたとしたら、その人は世俗の生活を捨て、マドゥコリをして生活しなければならない。これはルールである。

それでは、バウルはバウル派の世捨て人のことで、すべてのバウルはディッカとベックの通過儀礼をうけているのだろうか。わたしの観察によると、何人かのバウルは、ディッカとベックの両方ともうけていている。また何人かは、ディッカだけをうけていている。しかし、大半のバウルは、その両方とも経験していない。

ディッカの通過儀礼をうけていないバウルは、バウル派の構成員ではない。したがって宗教的トレーニングもうけていない。しかし彼らは、「わたしはバウルの道をあゆんでいます」とこたえたのである。バウルの道をあゆんでいると語った彼らは、「バウルの歌と音楽の伝承者」である。しかし、「バウルの歌と音楽の伝承者」は、かならずしも「バウルの宗教の伝承者」ではないのである。

それでは、バウルの道をあゆんでいると語った彼らは、バウルの衣装を着てバウルの歌をうたい、音楽を演奏するだけの、「にせもの」のバウルなのであろうか。すでにあきらかなように、宗派という視点からではベンガルのバウルの現実が把握できない。なぜならば、バウルという語が「ベンガルのひとつの宗派とその構成員」をさすなら、みずからバウルと名のらず、他者からもバウルとみなされていない「在家の弟子」を、ベンガルのバウルとして算入しなければならないからである。また、みずからバウルと名のり、他者からもバウルとみなされている多数の「にせもの」を、ベンガルのバウルから除外しなければならないからである。

バウルのライフヒストリーに関するわたしの資料は、ディッカの通過儀礼をうけたバウルは、それをうけた時点で、すでにマドゥコリの生活を採用しバウルになっていた、という事実を暴露する。そしてベックの通過儀礼は、ディッカの通過儀礼よりも、さらにのちの人生のでき事だったのである。

「神との合一」というバウルの宗教の究極の目標に到達するためには、バウルの「サドナ（成就法）」とよばれる宗教儀礼を実践しなければならない。そのためには、ディッカをうけて特定のグルに入門し、一連の宗教的トレーニング（シッカ）をうけることが不可欠である。しかし、おおくのバウルが証言する。「バウルの道の第一歩は、マドゥコリの生活を採用することである」と。ベンガルのバウルは、本質的に、「バウルの道を追求する人」である。バウルの道の追求者とバウル派の構成員とは、かなりの部分で重複する。しかし「バウルの道」と「バウル派」とは、次元のちがう概念なのである。

バウル研究者のあいだにみられる混乱は、彼らの関心の中心が、「人間としてのバウル」よりも、バウルの歌や宗教や音楽「そのもの」にあったことに起因するように思われる。結果として彼らは、バウルの主張する「バウルの道」という概念そのものと、バウル派の「在家の弟子」の存在に気づかなかったのである。以上の議論から、「バウルの道の追求者」と「バウル派の構成員」との関係は、つぎの図2に示すことができるだろう。

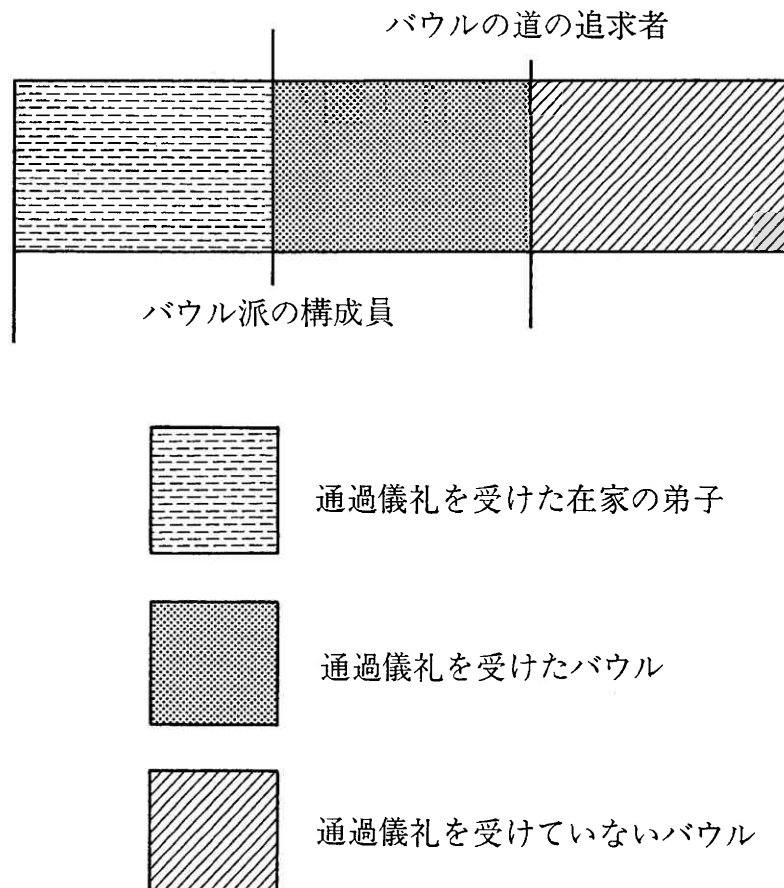


図2：「バウルの道の追求者」と「バウル派の構成員」

おおくのバウルが説明してくれた「バウルの道」を要約すると、つぎのようになるかと思う。

人は、もしバウルの道にしたがうならば、だれでもバウルになれる。ただし、バウルの道の第一歩では、(カーストの義務を放棄し) マドゥコリの生活を採用しなければならない。バウルの道の究極の目標は、人間の肉体に存在する神と合一し、神を実感することである。バウルと名のり、バウルの歌をうたい、マドゥコリの生活をするだけでは、バウルの道の半分しかすすんでいない。バウルの道の究極目標に到達するには、宗教的トレーニングが必要である。バウルの歌を通じてバウルの宗教をまなび、ヨーガを通じて自己の心身を鍛えなければならない。そして最終的に、バウルのサドナを実践しなければならない。そのためにはグルの導きが必要である。

2. もうひとつのライフスタイル

「マドゥコリ」の生活は、バウルが選択したライフスタイルである。彼らはマドゥコリという世捨て人のライフスタイルを採用し、「バウルになった」のである。それでは、ベンガル社会の「だれが」「なぜ」マドゥコリの生活を採用し、バウルになったのだろうか。

まず、バウルの姓と出身カーストを検討しよう。

国勢調査などによりカースト意識が高まっていった19世紀末以降、姓に相当する要素や個人名の一部を親と子が共有する形態が社会一般に広まっていった。姓を名のることが一般化する過程で、ヒンドゥー教徒の姓として採用されたのは、カースト名(ジャーティ名)、ゴートラ名(伝説的な始祖に結合した外婚集団名)、称号・資格、先祖の発現地やその特徴、職業・役職名などであるという[藤井 1992: 411-512]。しかしベンガル社会の、いったいだれが「バウルの道」をあゆみはじめたのかを、バウルの姓からさぐることはほぼ不可能である。なぜなら、ほとんどのバウルは「ダシュ」や「ダシュ・バウル」といった姓を名のっているからである。「ダシュ」という語の意味は「召使」である。だからといって、彼らがシュードラ階級出身者だと即断できない。これらの姓は宗教名である。彼らはバウルになった時点で改名し、あたらしい姓として「ダシュ」(神のしもべ)や「ダシュ・バウル」(神のしもべのバウル)といった宗教名を名のったのである。これらの宗教名には、出自や家柄などを暗示する「しるし」がまったくない。バウルに彼らの以前の姓について質問しても、ほとんどのバウルはこたえようとしなかったのである。

出身カーストについての質問にも、ほとんどのバウルがこたえなかった。なかには実在しない「人間カースト出身」(人間にはカーストの区別はない)とか、「男性カースト出身」(人間には男か女しかない)とか、「鳥カースト出身」(鳥のように自由だ、つま

りカーストがない)とこたえて、わたしの質問をはぐらかすバウルもいた。このことは、バウルがカーストそのものを否定していることを反映している。また、質問にこたえてくれたバウルの出身カーストも、最上層のバラモンから中層や下層カースト、そして最下層にいたるまで、ベンガル社会の全階層におよんでいる。したがって、バウルの出身カーストの傾向についても、これといった結論をだすことができない。

一般的に、教育水準と経済水準は比例するといわれる。バウルの出身経済階層を、バウルの学校教育年数を手がかりに検討しよう。

インドの学校教育制度は、普通教育10年(初等教育5年、前期中等教育5年)、後期中等教育2年、大学教育3年である。⁵⁾1991年の国勢調査の結果によると、7歳以上の識字率は52%で、はじめて半分以上をこえた。これは全国的な就学率の向上の結果である。しかし性別でみると、男子64%、女子39%で、この格差は独立以来縮小していない。⁶⁾

66名のインフォーマントの学校教育年数は、10年以上が2名(3%)、10年が1名(1.5%)、6年から9年が6名(9.1%)、5年が5名(7.6%)、1年から4年が23名(34.8%)、1年以下が29名(43.9%)である。これらの数字から判断するかぎり、バウルの識字率は、一般のベンガル人のそれと、ほぼかわらないようである。学校教育年数1年以下には高齢者や女性がおおいのも、一般のベンガル人の傾向と一致する。ちなみに、学校教育年数10年以上の2名のバウルは、いずれも大学卒である。

バウルの学校教育年数の特徴は、初等教育(小学校)や前期中等教育(中学校)の修了者に対して、中途退学者の比率がたかいことである。これは、大多数のバウルが、ベンガル社会の経済階層の下層または最下層出身者であることを反映している。貧困層にとって、不測の事態が発生したときに対処しうる手段は、まず教育費を削減することである。

ベンガル社会の「だれが」「なぜ」バウルになったかを、バウルのライフヒストリーから考察しよう。まず、いくつかの事例を紹介しよう。

事例1：NDB

NDBは、1952年、東パキスタン(現在のバングラデシュ)のダッカ県N村で生まれた。生まれてまもなく、両親とともにインド・西ベンガル州ナディア県T町に、難民として移住した。ナディアに移住してから妹がふたり生まれた。しかし、父母は別居状態で、父は月に一度か二度家に帰るだけだった。父母は不仲で、夫婦喧嘩が絶えなかった。

5) インドでは、学校教育制度の運用は州政府にゆだねられている。西ベンガル州の場合、大学進級試験は、前期中等教育終了年(10年生)と後期中等教育終了年(12年生)に実施される。

6) 2001年の国勢調査では、識字率は65.4%に上昇した。インドの識字教育は成果を生み出しつつあると評価できる。しかし、識字率の男女間の格差はいまだに縮小していない。この事実も、依然としてインドが教育の機会の不均等という課題をかかえていることを示している。

NDB が4歳か5歳の時、父母は正式に離婚し、父は24パルガナス県のN村に転出した。両親の離婚後、妹たちは、母のもとに残ったが、NDBは父方の祖母といっしょに住むようになった。祖父はすでに亡くなっていた。祖母は詠歌をうたって物乞いをしながらNDBを育てたという。

NDBが8歳か9歳のとき、母が亡くなった。母の死を父に知らせたが、父は来なかった。それ以後、父から消息が絶えている。妹たちとも会っていない。

NDBが12歳か13歳のとき、祖母が亡くなった。祖母の死後、NDBはひとりぼっちで、ナディア県やムルシダバード県を転々とした。生活費は、村や列車で歌をうたって稼いだ。歌や音楽は子どものころからすきで、母や祖母から習った。NDBは、15歳か16歳ころから、バウルと名のり、バウルの衣装を着て、バウルの歌をうたうようになった。バウルの歌は、他のバウルがうたっているのを聞きおぼえた。

NDBは、19歳か20歳のとき、ナディア県で結婚したが、まもなく離婚した。17歳になるはずの息子は、現在ナディア県に住んでいるが、ここ数年会っていない。NDBは、27歳か28歳のとき再婚した。現在は、2度目の妻と子どもたちと暮らしている。

NDBは、昨年(1987年)、ナディア県A村からビルブム県ボルプール市S地区に移住した。その理由は、S地区はボルプール駅に近く、列車で歌をうたって稼ぐのに便利だからである。またボルプールは、ヴィシュヴァ・バーラティ大学の所在するシャンティニケートンに隣接しており、バウルの歌の歌手として活動する機会がおおいと考えたからである。

事例2：PRD

PRDは、ビルブム県のJK村に住む50代後半のバウルである。彼はバルドマン県のB村で生まれた。彼の父はパウリ・カースト⁷⁾出身で、日雇いの農業労働者だった。しかし父は病気で、ずっと寝たきりだった。

PRDは、子どものころから歌や音楽がたいへんすきだった。彼は素人の音楽好きのグループに参加し、そこで歌をうたったり、踊りをおどったりしていた。「カナイ・バブ」⁸⁾がグループのリーダーだった。ある日、カナイ・バブがPRDをむかえに、家まで来ていた。PRDは病床の父に、「カナイ・バブがむかえにきてくれた。ほくは歌をうたいに行きたい。彼といっしょに行きたい」と、許可を求めた。そのとき、父はしばらく息子の顔をみつめ、「おまえは、将来、歌をうたわねば食べてゆけないだろうな」といった。PRDはまだ子どもだった。彼には父の言葉が理解できなかった。数日後、PRDは家に

7) パウリ・カーストは、西部ベンガルで、輿かつぎ、農業労働、土工、石工、レンガ工などの職業を生業としたカースト。パウリ・カーストの社会的地位は非常にひくい。

8) 「バブ」は、男性の年長者に対する尊称。名前につけて「～さん」。

帰った。しかし彼は、父に会うことができなかった。父は、PRD が11歳のときに亡くなった。

父の死後まもなく、PRD は結婚した。妻もバウリ・カースト出身だった。彼らの結婚は、双方の親族が相談してきめた。彼らは結婚したが、夫と妻はまだ若い少年と少女だった。しかし PRD は、食べるために働かなければならなかった。彼は、かつて父がしていたように、日雇いの農業労働をして生活費を稼いだ。日の出から日没まで、ただ命じられるまま家畜のように働いた。夜になって数曲の歌をうたうのが、唯一の楽しみだった。

PRD は、ふとしたきっかけで「振り子行者」という愛称のバウルと出会った。振り子行者は、仲間といっしょに PRD の住んでいた B 村にやってきたのである。彼らは、人家の門口で「神の御名」を唱えてマドゥコリをしていた。また彼らは、村の一角でバウルの歌もうたっていた。PRD は、愛用の楽器を抱えて家をとびだした。

このとき PRD は、振り子行者にバウルの歌を一曲教えてもらった。振り子行者は、最初に歌詞のすべてをゆっくりと語り、そのあと、歌詞の一節一節をゆっくりと繰り返した。PRD は、一節一節、振り子行者のあとをゆっくりと復唱した。振り子行者は、PRD が歌詞をおぼえると、その歌をうたわせた。PRD がうたっているあいだ、振り子行者は手拍子を取り、PRD がまちがうと、それを訂正した。振り子行者は、上手な歌い手ではなかった。しかし PRD は、振り子行者がバウルの歌をたいへんよく知っているということに、すぐに気がついた。PRD は、カーストの存在そのものを否定するバウルの歌がすっかり気に入った。そして、振り子行者にもっと歌を習いたいと思い、仲間に加えてほしいと頼んだ。振り子行者は、PRD の頼みを聞き入れた。PRD は、バウルの歌をうたいながらマドゥコリをして生活費を稼ぎはじめたのである。そのとき PRD は、16歳か17歳だった。

事例3：BDB

BDB は、1937年、ビルブム県の S 村で生まれた。彼はそこで、母と兄といっしょに住んでいた。BDB の母は、クリシュナ神の賛歌キールタンの名人だった。彼女は「キールタンの歌姫」（キルトネール・ラニ）とよばれるほど華やかで、歌手としてたいへん人気があった。

BDB の父は、ビルブム県の K 村で BDB たちとは別に住んでいた。彼はそこに別の家庭をもっていた。父の実家は、最高位にランクされた由緒ある家柄の「クリン・バラモン」で、かなりの農地を所有していたという。しかし、父は財産と家庭を捨て、バウルの道を追求するようになった。彼は PDB と名のり、村から村へと放浪する生活をはじめた。

厳格な祖父にすれば、若いころからあちこちと外出し、結婚後もおちつかず人気歌手と恋仲になり、あげくのはてに妻と子を捨ててバウルになった父は、とんでもない「放蕩者」だったようである。しかし、父にすれば、規則でがんじがらめのクリン・バラモンの生活と、意思に反した結婚生活をつづけることは、「耐えがたいこと」だったようである。

BDB は子どものころから歌や音楽がすきで、母からたくさんの歌を習った。そして、ときどきやってくる父からも楽器の演奏法を教えてもらった。彼らは会うたびに歌をうたい楽しくすごした。

BDB が9歳のとき、S村からボルプール駅の裏手のS地区に移住した。洪水で家が流されてしまったからである。まもなくバウルとなった父も同居するようになった。しかし、彼らの生活は急に貧しくなった。このころから BDB は、歌をうたって稼ぐようになった。それ以来、彼は経済的に自立している。

BDB は、20歳すぎから深刻に悩んだ時期があった。「クリン・バラモンだった父と人気歌手の母との間に生まれた自分は、いったい何者なのだろうか」と自問した。「父のように、バウルの衣装を着てマドゥコリをして稼いでいるが、自分は本当にバウルなのだろうか」と自分の心に問うた。BDB は、本当はマドゥコリなどしたくなかった。歌や音楽以外の仕事の可能性についても考えた。しかし、読み書きも満足にできない彼に、まともな仕事などあるはずがなかった。彼は「生きる術はマドゥコリしかない」ことを思い知った。「マドゥコリの生活は、飢えよりまし」と悟ったのである。

事例4：AGB

AGB は、1952年、ビルブム県北部のN村で生まれた。彼が2歳半のときに、妹が生まれた。しかし、母は産後の肥立ちが悪く、妹がまだ生後21日の乳児のときに亡くなった。母の死後、「マシ」（母の姉妹）が妹を育ててくれた。マシが出産後の授乳期だったことは、妹にとって幸運だった。AGB は母方の祖父母に育てられた。

AGB の父はバラモン司祭者だった。母の死後まもなく、父はランプールハートに転出し、そこで再婚した。父はときどき面会に来てくれた。

AGB の祖父母は、熱心なヴィシュヌ教徒だった。祖父母の家では、毎日朝夕に、打楽器をうちながら「神の御名」を勤行するのが常だった。AGB も祖父母の横にすわって勤行した。また年に1度か2度は、「モホトショブ」（宗教的大宴会）も開催された。宴会に招待されるのは、ヴィシュヌ派の行者や在家の信者だった。家の中庭で、何百人もの招待客がいっしょに食事をする光景は、それは壮観なものだったという。

祖父母は AGB を学校に通わせた。AGB は勉強が嫌いだったわけではないが、なんとなく学校になじめず、3年でやめた。学校をやめたあと、祖父母は音楽好きの孫に、両

面太鼓の「コール」を与えた。AGBはそのコールがたいそう気に入り、朝から晩まで練習した。

AGBが16歳か17歳のとき、祖父母があいついで亡くなった。祖父母の死後、AGBは父と同居することになった。父はAGBに、バラモン司祭者としての訓練をはじめた。最初は、神像に水や花、食物などの供物を捧げ、礼拝を父の指示どおりに行った。将来は、寺院や祭の場で詳細な儀軌にもとづいて行う礼拝も訓練されるはずだった。

父の家には、父、継母、腹ちがいの弟と妹がすんでいた。しかし父の家は狭く、AGBの居場所がなかった。継母は何かにつけてAGBにつらくあたった。AGBも継母のことを嫌っていた。しかしAGBは、彼の感情を父に伝えることはできなかった。彼はしばしば外出しては、あてもなくラムプールハートの町をうろつくようになった。

ラムプールハート駅西側のS地区に、AGBの祖父母と懇意だったRG師というビシュヌ派の行者がいた。AGBが家に帰りそびれたとき、彼はしばしば師のアーシュラムに宿を求めた。AGBが「今晚泊めてください」と頼むと、師はいつも彼を大歓迎し、アーシュラムに招き入れた。

AGBが21歳のとき、父が急死した。父の後継者として、腹ちがいの弟がバラモン司祭者になった。父の死後、AGBは父の家に帰らなくなった。居心地のよいRG師のアーシュラムに、いつの間にか住みついてしまったのである。そしてごく自然に、AGBはコールをたたいて神の御名を唱え、マドウコリをして生活するようになった。

事例5：NGB

NGBは、1952年、ナディア県のK村に生まれた。彼の両親は、東ベンガル（現在のバングラデシュ）出身で、インドとパキスタンの分離独立のすこし前に、西ベンガルに移住していた。両親がK村に定着したとき、父はそこで約20ビガ⁹⁾の農地を購入した。

NGBは子どものころから音楽がすきだった。彼は学校で勉強するよりも、専門の先生に師事して、本格的に音楽の勉強をしたいと思っていた。彼は母といっしょに、彼の希望を父に伝えた。しかし、父は息子の希望を無視して学校に行かせた。子どもだったNGBは、父に逆らうこともできず、10年間学校に通った。父は息子が大学に進学するものと思っていた。しかしNGBは、大学進級試験に失敗してしまった。父は、親の期待にそむいたと非常に怒り、「勉強が嫌いなら働け」と息子に命じた。NGBは、いくつかの片手間仕事をした。しかし、一生の仕事にしたいと思えるものは見つからなかった。

NGBの兄は父に従順で、常に父の期待にこたえていた。父のいうとおりに大学を卒業し、小学校の教員になり、父の取り決めた結婚をした。

9)「ビガ」は、インドの地積の単位。1ビガ≒1335.5平方メートル。

NGBが19歳が20歳のとき、父は突然、息子の意向を聞く前に、結婚の取り決めをしてしまった。NGBは結婚のことなど考えたこともなかった。NGBの友人には、親の取り決めた結婚に従った者が何人かいた。しかし、結婚生活がかならずしも幸福とは思えなかった。本人の意向を無視した結婚は、人を家庭生活という牢獄に閉じ込めるだけだと思った。NGBは、生まれてはじめて父の命令を拒否した。父は「親を無視するような息子は息子ではない。出て行け」と、どなり散らした。

数日後、NGBは家を出た。そしてPB師を訪ねた。師はビシュヌ派の行者で、R村にアーシュラムをもっていた。師は、NGBの住んでいたK村のだれかの家をとときどき訪問していたので、NGBは子どものころから師のことを知っていた。師は会うたびにNGBをかわいがり、NGBも師を慕っていた。NGBは師に事情を話し、師のアーシュラムにしばらく滞在したいと懇願した。師はNGBの願いをかなえた。

NGBは、PB師のアーシュラムに約1年間滞在した。その間に、NGBはディッカを受け、師の弟子となった。NGBは師から宗教名を授けられた。NGBは、今までの人生が終了し、新しい人生がはじまったと思った。

NGBはキョウダイ弟子から楽器演奏の手ほどきを受けた。そして、小さなシンバル(コルタール)を購入した。もともと音楽がすきだった彼はすぐに上達した。ある日、NGBは生まれてはじめて、シンバルをたたき「神の御名」を唱えながら、マドゥコリに出かけた。NGBはわずか数時間で、数キロの米といくらかの現金を集めることができた。それは予想を上回るものだった。つましく暮すなら、それだけあれば十分だと思った。そのとき彼は、心にひらめくものを感じた。

NGBは、いつもどこかへ行きたいと思っていた。彼は自分の人生を自由に生きたいと思っていた。土地や家に執着し、家庭という牢獄につながれるのだけは避けたいと思っていた。彼は一所不住の人生を送りたいと思っていた。彼はPB師に別れを告げ、聖地巡礼の旅に出かけた。

聖地巡礼の旅が5年目に入ろうとしていたころ、NGBは、西ベンガル州のB町を訪ねた。B町はインドにある「五十一母神座所」(ショクティ・ピート)¹⁰⁾のひとつである。B町は、シャークタ派¹¹⁾の聖地であるとともに、シヴァ派の聖地でもある。B町は豊かな温泉でも有名であるが、町は静かで平穏な雰囲気¹¹⁾にみちていた。町のはずれには、清ら

10) B町には、水牛の姿をした魔神を退治したドゥルガ女神を祀った「モヒシャモルディニ寺院」がある。ドゥルガはヒンドゥー教の大女神。シヴァ神の妻。ドゥルガは「超えがたい女性」という意味で、悪魔たちを殺す恐ろしい女性戦士とみなされている。

11) ヒンドゥー教は、シヴァ派とヴィシュヌ派の2派を基本とするが、3番目にシャークタ派をたてることがある。「シャークタ」とは「ショクティ」の形容詞形で、「ショクティを信じる人びと」を意味する。ショクティという語は元来「力」「エネルギー」を意味する普通名詞であるが、静的男性に対して動的女性というインド的観念から、絶対神の力の側面としてのショクティは、神妃として人格化されるようになった。

かな川も流れていた。

NGBがB町を訪ねたとき、彼は寺院に住みついている巡礼中のサードゥー¹²⁾を見かけた。NGBはB町にしばらく滞在してもよいなと思った。そして、だれも滞在していないシヴァ寺院をみつけ、そこをしばらくの宿とすることにした。毎朝、寺院の掃除をし、神像を花で飾った。神像に捧げられた供物を、「おさがり」(プラサード)として食べることができた。彼の寺院滞在に反対する者は、だれもいなかった。

しばらくして、NGBはB町に数人のバウルが住んでいるのに気づいた。そして、バウルがそれぞれ歌をうたいながらマドゥコリをしているのを見かけた。また、彼らがときどきグループを組み、いっしょにバウルの歌や音楽を演奏しているのを知った。彼らは仲がよく、とても楽しそうにみえた。NGBは楽器の演奏はできたが、歌はうたえなかった。彼はバウルの歌にすっかり魅せられてしまった。

NGBは、過去4年間インド中を放浪し、聖地巡礼の旅を続けてきた。いつも孤独な一人旅だった。彼は「この4年間の旅は、ひとりで当てもなくさまよっていただけなのか」と自問した。「そろそろ放浪生活に区切りをつけてもよいな」と思った。NGBはバウルの歌を習いたいと思った。そして、B町のバウルの仲間に加わりたと思った。

B町のバウルは、最初NGBのことをサードゥーと思っていた。なぜならNGBは、シヴァ寺院を仮の宿とする一所不住の巡礼者であり、ほろを身にまとい、髪や髭は伸び放題、しかも所持品もほとんどなかったからである。実際、彼らはNGBのことを「サードゥー・ババ」とよびかけた。しかし、NGBのライフスタイルはサードゥーのようではあるが、本物のサードゥーではなかった。もっとも、サードゥーとみなされることは、巡礼の旅をつづけるには便利なこともしばしばあった。旅行中、NGBの無賃乗車をとがめた車掌はひとりもいなかったのである。しかしNGBは、一所不住のサードゥーのような行動をやめるのは今だと思った。NGBは、バウルの歌を習いたいとバウルに伝え、仲間に入れてほしいと頼んだ。彼らはNGBの意外な要請に驚いた様子だったが、「OK。君がその気なら、われわれは大歓迎だ」とあっさりと許可した。それ以来NGBは、バウルと名のり、バウルの衣装を身にまとい、バウルの歌をうたうようになった。マドゥコリの生活は、PB師のアーシュラム滞在時から続いている。

事例6：MBB

MBBは、「大卒バウル」である。彼は1941年、バンクーラ県で生まれた。出身カーストは、油しぼりカーストの「テーリー」であるが、父は約15ビガの土地を所有する裕福な農民だった。大学卒業後、中学校の教師の職をえたが、うまくやってゆけず2年で退

12) サードゥーは、ヒンドゥー教の出家の乞食遊行(こつじきゆぎょう)の修行者。

職した。その後、やはり教師をしている兄の紹介で別の中学校に勤めたが、やはりうまくやれず、そこも2年で退職した。彼は、教師としての自分の資質に疑問をもち、悩みつづけた。その間、宗教講話を聞くためにコルカタ（カルカッタ）のラーマクリシュナ・ミッションなど、いくつかの施設を遍歴した。またヴィヴェーカーナンダ¹³⁾の著作集などを読みあさった。解決を求めて試行錯誤していた時期があったのである。

MBBが27-28歳のとき、友人とふたりで、徒歩でプリー¹⁴⁾巡礼を計画した。途中のメディニプール県R村の河原で、彼らは自炊をしていた。彼らの行動を不審に思った村びとが、その村でアーシュラムをもっていた宗教的求道者に報告し助言をもとめた。村びとは助言に従い、MBBらをアーシュラムに連れていった。MBBはそこで、ホリダシュ・ボイラッグヤ・バウルに出会ったのである。MBBは、無学のバウルが真理を語るのを聞いた。そして、真理を前にして知識は無力であることを悟った。彼は友人と別れ、このバウルに弟子入りをした。そして、グルの歩む「バウルの道」へ彼もつづいたのである。

事例7：SD

ビルブム県T村のSDは、「元バウル」である。彼自身、「わたしはバウルだったが、もはやそうではない」と述べた。SDは、小さい時に両親を失い、子どものいなかった母の兄に育てられた。伯父は、ヴィシュヴァ・バーラティ大学に、庭師として勤めていた。SDは4年間学校に通ったが、勉強が好きではなかったのでやめた。そのあと仕事にもつかずブラブラとした生活をしていた。退屈しのぎの趣味として、シュリニケートン¹⁵⁾のBDBという名のバウルに歌を習いはじめた。SDが18歳か19歳のとき、彼は伯父のもとを離れ、バウルのライフスタイルを採用した。彼はバウルの衣装を身につけ、人家の門口で歌をうたい、マドゥコリをして生活をするようになったのである。そのとき、彼は確かに「バウルの道」を歩みはじめた。そして、バウルの生活が10年ばかりつづいた。しかし彼は、伯父が死んだと同時に、「バウルの道」を歩むのをやめてしまった。彼は、伯父の家屋敷と大学のお抱え庭師の職を、そっくり相続したのである。

さて、ベンガル社会の「だれが」「なぜ」バウルになったかを、バウルのライフヒス

13) Vivekananda (1863-1902)。近代インドのヒンドゥー教の復興運動の完成者であるばかりではなく、社会奉仕を強調し、インドの覚醒を促し、インド民族運動にも影響を与えた。1897年、師の名を冠したラーマクリシュナ・ミッションを創設して、世界に向けての伝道活動を行なった。

14) オリッサ州東部のベンガル湾に面する宗教都市。ヒンドゥー教の四大聖地の一つ。ジャガンナート寺院の所在地。ジャガンナートとは、ヴィシュヌ神の化身クリシュナの異名で、「世界の支配者」を意味する。

15) シュリニケートンは、ヴィシュヴァ・バーラティ大学の中核施設の所在するシャンティニケートンに隣接し、同大学の農学部が所在する。

トリーから考察しよう。

バウルに、なぜ彼らがバウルになったのかという質問をすると、十中八、九、「子どものころから歌や音楽がすきだったからだ」という答がかえってくる。しかし、個々のバウルのライフヒストリーを詳細に検討してみると、長期にわたる心理的・経済的不安を経験したのちに、バウルになったようである。ほとんどのライフヒストリーは、彼らがマドゥコリの生活をはじめたり、ゲルをもとめたりする前に、それらの行動のきっかけとなった危機的状況があったことを、それとなくしめしている。

ベンガル社会の一群の人びとが、なぜバウルの道をえらんだのかを、ただひとつの要因をあげて説明することはできない。彼らがバウルになった動機には、いくつもの要因が複雑にからみあっているのがふつうである。それらは、慢性的な貧困、父母の別居による家庭崩壊、本人の意志のはいりこむ余地のない結婚に対する不安、世代間の反目、そして土地所有権や相続権をめぐる争いなど、解決できない抑圧の具体的な経験である。

バウルになった動機のもうひとつの主要な要因は、乳・幼児期における親の死の経験である。ライフヒストリーの資料によると、10歳未満で父親と死別したバウルは18名(27.3%)、おなじく母親と死別したバウルは14名(21.2%)である。このうち、両親ともに死別したバウルは8名(12.1%)である。これらの比率は、一般のベンガル人のそれよりも、はるかに高いと思われる。

母親の死後、母親を失った乳・幼児は、父方か母方の血縁親族に育てられ、父親は再婚してあたらしい家庭をもつことがおおいようである。いずれにせよ、このような境遇にそだったバウルは、父親の死にともなって、異母兄弟間の相続権あらそいにまきこまれた事例が数例あった。また、乳・幼児期に父親を失ったバウルは、若くして夫を死なせた不吉な存在としての母親とともに、ただちに経済的にも心理的にも不安定な状況においこまれてしまっていた。さらに、幼児期に両親と死別し孤児となったバウルは、「物乞い」をするしか生きてゆく方法がなかった。しかし、近隣の人びとの処置で、その社会の世捨て人の養子や養女として保護され、育てられた幸運なバウルも数名いた。これは、世捨て人の存在そのものが、その社会全体の維持に寄与していることを暗示している。

バウルになる動機となったその他の要因には、低いカースト身分による抑圧、単調な村の生活からの脱出願望、神と接触したいという宗教的欲求、世捨て人に対するあこがれなどを指摘できる。しかし、大多数のバウルに共通していることは、程度の差はあれ、彼らが貧困生活から脱却できないで苦しんでいたことである。彼らは、まともな仕事につけないそれなりの理由をかかえていた。生きていく手段は、マドゥコリしかなかった。「マドゥコリの生活は、飢えよりまし」だったのである。彼らは、世捨て人の生活様式を模倣することによって、とりあえず「生存」することができたのである。

このように、バウルになる動機となった要因のおおくは、カースト社会に内在している特質や矛盾に由来するようである。そしてそれらの要因が彼らを脱出できない貧困においこみ、結果として生じた感情的な緊張や心理的な不調和は、バウルには、「現実」であるが「耐えがたい」と感じられていたようである。カーストの地位や身分による限界、インドの家族制度や結婚制度の本質、経済的な不安定さなどに起因するこれらの社会的・心理的な問題に対する解答は、「現実に耐える」か「耐えがたい現実から自由になる」かの二者択一である。このような状況のなかで、わたしがインタビューしたバウルのおおくは、これらの問題に対する意味ある解決策を、「文化的に是認された世捨て」、すなわち「マドゥコリの生活」に見いだすことができたのである。

マドゥコリの生活は、個人の選択肢が制限されたカースト社会における、選択可能な「もうひとつのライフスタイル」である。マドゥコリの生活は、それがどのような形態であれ、カースト制度が存続するかぎり、個人が生き延びるための「生存戦略」としてこれからも再生産されるだろう。またマドゥコリの生活は、カースト社会のなかで差別されたり排斥された人びとや、カースト社会の社会関係や規範に疑問をもつ人びとの、心理的・社会的な「適応戦略」として、これからも存続するだろう。

マドゥコリの生活がいかにきびしいものであっても、バウルの道は、おなじ道をあゆむバウルのあいだに仲間意識をそだてる。またバウルの道は、ディッカやベックの通過儀礼を通じて、グルとの師弟関係を軸にキョウダイ弟子をつくり、擬制的親族関係の輪をひろげる。さらにバウルの道は、宗教的トレーニングを通じてバウルを鍛える。バウルの歌を通じてバウルの宗教を学び、ヨーガを通じて自己鍛練に努力したバウルは、精神的にも肉体的にも自信をもつようになる。そして、みずからの肉体に存在する神を実感するために、サドゥナを实践するのである。バウルの道の究極の目標に達したバウルは、宗教的求道者として、世俗の人びとからも尊敬されるのである。

「バウルの道」は、「サードゥー」(ヒンドゥー教の修行者)や「ヨギー」(ヨーガ行者)、「ボイラギ」(ヴィシュヌ派の出家者)、「ファッキール」(イスラム神秘主義の行者)など、ベンガル社会に存在するいくつかの「世捨ての道」(シヨンナーシ・ポト)のひとつである。インド文明には、カースト制度にともなって、それと矛盾する世捨ての制度が、文明の装置として組み込まれているのである。

バウルのライフヒストリーは、バウルがベンガル社会の「周縁部」の輪郭のはっきりした集団であることを十分に示している。ベンガル社会の大多数の人生を規定するカースト制度に対する彼らの否定は、バウルを社会の支配的な部分の外側に、そして対立するものとして位置づける。それにもかかわらず、バウルは社会的に認知された周縁的集団の構成員として、ベンガル社会と親密に共存している。このように、ベンガル社会の「世俗の人びと」と「バウル」とのあいだには、社会的・文化的な緊張と均衡が日常的

に存在する。そして、バウルという周縁的人間の存在そのものが、ベンガル社会の「中心部」の崩壊を守っているかのようである。なぜなら「バウルの道」は、カースト制度がいまだに根強いベンガル社会において、社会を拒否した人に、あるいは社会に拒否された人に、「もうひとつのライフスタイル」を提供しているからである。それはあたかも、必然的に矛盾をふくまざるをえない複合社会が周縁的人間を生みだし、その周縁的人間の存在そのものが、社会全体を完全な分裂から守っているかのようである。しかしバウルにとっては、カースト制度の維持にはたす彼らの役割は、まったく理解の範囲をこえたものであろう。

参考文献

Capwell, Charles

1986 *The Music of the Bauls of Bengal*. Kent, Ohio: The Kent State University Press.

Dasgupta,

1969 *Obscure Religious Cults* (third edition). Calcutta: Firma K. L. M.

Dimock, Edward C., Jr.

1966 *The Place of the Hidden Moon*. Chicago: The University of Chicago Press.

藤井 毅

1992 「名前」『南アジアを知る事典』511-514頁、弘文堂。

Kane, Pandurang Vamin

1941 *History of Dharmasāstra*. Vol. 2. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

村瀬 智

2006 「ベンガルのバウルの文化人類学的研究(1)」『大手前大学社会文化学部論集』第6号、331-349頁。

Renou, Louis

1968 *Religions of Ancient India*. New York: Schocken Books.